

平成二十二年度

卒業論文概要

2011年1月提出

新井 ちひろ	1
遅子建研究 — 「秧歌」、「香坊」、「逝川」の分析を中心に —	
上田 えり子	2
植民地期朝鮮における朝鮮人、日本人の識字率について	
占部 妙子	3
商鞅の変法と田制について	
遠藤 和恵	4
国民保導連盟について	
大高 里菜	5
南北朝鮮の言語差に対する認識について	
後藤 智香	6
光武帝による奴婢政策に関する一考察	
佐島 小乃実	7
中国紅十字会の成立と変遷 — 清末から1923年の活動を中心に —	
信田 奈那子	8
1880年代～1910年代初期の京城における在朝日本人社会について — 京城居留民団の活動を中心に —	
田中 翔子	9
1930年代における在日朝鮮人の生活史 — 在日朝鮮人生活調査を通して見る生活環境と調査の特徴 —	
野口 真莉菜	10
満州731部隊と日本の細菌戦	
綿貫 恵	11
金庸武俠小説研究 — 『射鵬英雄伝』の分析から —	
Loh Yan Yee Penny	12
中国近代秘密結社と上海 — 民国の上海青幫を取り上げて —	

新潟大学人文学部 地域文化課程

アジア文化履修コース

<http://hyena.human.niigata-u.ac.jp/files/asiac/asia.html>

遲子建研究

— 「秧歌」、「香坊」、「逝川」の分析を中心に —

新井 ちひろ

遲子建（1964～）は黒龍江省出身の女性作家である。遲子建の小説には故郷・黒龍江省の大自然と、そこで生活する庶民の姿が描かれており、この濃厚な郷土色は遲子建小説の最大の特徴とも言える。そしてその中に、遲子建は自身の生命観を描き出している。本論文では、現代中国の文壇において自己の文学を創作し続け、多大な評価を受ける作家、遲子建を研究対象とした。遲子建小説の特徴の中でも、生命観及び遲子建の描く女性登場人物に論点を絞り、作者の創作意識に迫った。

第一章では遲子建の経歴をまとめ、特に遲子建の作家としての成長経歴に存在した特殊な生活境遇に注目し、作家・遲子建の誕生のきっかけを見た。また、遲子建小説作品群の分類として多く用いられている“童話世界”と“神話世界”を示し、“神話世界”作品に生命観の表現が見られることから、“神話世界”作品に分類される「秧歌」（1992）、「香坊」（1993）、「逝川」（1994）を本論文の研究対象とした。

以下、第二章では「秧歌」、第三章「香坊」、第四章「逝川」と、章ごとに作品分析を行った。女性については、小説に登場する女性を、周囲の人物との関係を考えながら考察した。その際、人生を「かき乱す」事柄に彼女たちがどう対応するのか、その時彼女たちに「もろさ」は現れるのか、「宿命」から逃れることはできないのか、という点に注目し、遲子建の描く女性像を明らかにすることをねらいとした。また、生命観については、登場人物の生と死、及び物語の舞台とそこに表されたモチーフをもとに考察した。

まず、女性についてである。本論文で取り上げた三作品に登場した女性たちは、そのほとんどが辛い出来事に遭遇していた。そして

その共通点として、その生活を「かき乱す」事柄が男性によって引き起こされている点が挙げられる。しかし、女性が男性に影響され生きる姿だけでなく、男性が女性に影響され生きる姿も描かれている。つまり遲子建は女性登場人物の苦難を描く中に男性の苦難をも描き出しているのである。遲子建小説に登場する女性は女性であることの悲劇を象徴するのではなく、そこから「宿命」に生きる人間の姿、人間の強さと弱さを表現しているのである。

次に生命観についてである。「秧歌」からは、どんなに賑やかな人生であっても、必ず終わりは訪れる、それを承知した上で希望を持ち、生きていくのである、ということが読み取れた。「香坊」には、生命は廻り廻るものであり、この循環は永遠に続いていくものである、という生命観が表現されていた。「逝川」からは、人間は時の流れに従って老いゆくものであり、老いゆく命は次の世代を生み出し、これが不断の時の流れの中で繰り返され、時代が繋がってゆく、という考えが読み取れた。これら遲子建の生命観には、繰り返される自然の営みから感じ取った、生命の循環が表現されている。

女性主義の主張もなければ、政治的主張をも含まない、遲子建の文学は純粹で素朴な「人」の物語である。中国東北で生活する人々の姿を、彼女は我々に見せてくれる。そしてその中に、人生や生命について、黒龍江の大自然に育まれた独自の視点で描き出すことに成功している。彼女の作品が読者を引き付ける要因は、彼女の文学に表現された未来への希望かもしれない。

植民地期朝鮮における朝鮮人、日本人の識字率について

上田 えり子

植民地期朝鮮では一般教育の普及とともに日本語教育が「帝国臣民」統合のひとつの大きな課題であった。その一方で民族運動や社会運動の側においても識字は重要な位置を占めていた。このように識字問題は朝鮮総督府の政策、そして朝鮮人の民族運動・社会運動とも高い関連性を持っていたのである。しかし、当時の朝鮮は漢文・ハングル・ひらがな・カタカナが使われる多言語多文字状況であったため、識字技能習得は非常に困難なことであった。そんな中、1930年に朝鮮国勢調査の一項目として朝鮮在住の日本人53万人・朝鮮人2,044万人に対して「読み書きの程度」調査が行われた。本稿は朝鮮国勢調査の「読み書きの程度」調査結果を全国から面まで幅広く分析を行った。それにより当時の朝鮮人・日本人の識字状況を明らかにしようとした。

第一章では、1930年朝鮮国勢調査における読み書きの程度調査の結果を分析し、全国から面別までの識字率を調べた。1930年朝鮮国勢調査の「読み書きの程度」調査は朝鮮で行われた4回の国勢調査のうち、この1度しか行われなかった。さらに調査項目の仮名とハングルの「読み」と「書き」については明確な基準はなく、記入者の基準に委ねられていたことは読み書きの程度調査の大きな欠点である。

次に読み書きの程度調査結果を全国の傾向を明らかにしてから、道別比較、府郡比較、府別比較、郡別比較、面別比較を行った。全国の傾向としては、日本人の約8割が仮名を読み書きできたのに対し、朝鮮人の約8割は文盲であるということが明らかになった。それ以降の府別比較では、釜山府の結果がB「カナのみ読み書きできる者」の項目で平均15%

に対し25.4%という高い割合を出し、逆にC「ハングルのみ読み書きできる者」の項目では平均13%に対して6.1%という低い割合を出し、他府とは違う割合を出していることが明らかになった。その要因を調べるため、第二章では慶尚南道の教育状況を研究した。

まず釜山府の教育状況は日本人と朝鮮人の教育状況の違いとして学校数に大きな違いがある。朝鮮人に対しては約67校なのに対し、日本人に対しては164校と倍以上の学校が設備されている。さらに1920年代は夜学を中心とした民族教育機関が増えるが1923年には、慶尚南北道に存在した私設学術講習会383ヶ所のうち、約3割は日本語普及のために存在していたのである。これらの事実により慶尚南道では1920年代日本語教育が盛んに行われていたということがわかった。

おわりに、全ての分析を通して共通することは、日本人はカナを読み書きできる者が多く、地域によって格差がほとんどなく、男女の差もほとんどない地域が多かった。一方、朝鮮人は逆の特徴を持っており、地域でも男女間でもそれぞれの部分で、識字率の差異があった。釜山府の教育状況は日本語教育が盛んに行われており、それが結果に現れたことがわかった。

商鞅の変法と田制について

占部 妙子

商鞅は秦の孝公(在位前361-前338)に仕え、二度にわたり変法を行った。商鞅の変法についてまとまって記された史料は『史記』商君列伝である。日本では土地制度を中心として、爵制・家族制・郡県制などの諸政策に関し、深い考察がなされてきた。その一方で、変法自体の史料批判は変法研究と比べると多くはない。2000年に吉本道雅氏が「商君変法研究序説」(『史林』83-4,2000年)を発表し『史記』の商鞅関係の記述の包括的分析に基づき、商鞅変法を歴史認識として相対化しよう試みられた。本論文では、この吉本氏の論文に依拠して商鞅変法の史実性を確認した上で、商鞅の行った田制に着目し、彼の人物像の分析を試みた。

第一章では、商鞅の変法は古代中央集権国家形成の第一歩として位置づけられると同時に、変法の内容理解は多岐にわたっていることを確認した上で、商鞅の変法と田制についての先行研究を整理した。また、変法が富国強兵という目的をもってなされたものであることから、第一次、第二次変法は、それぞれの法令がお互いに補完しあう部分があり、田制は特に他の法令との関わりが多く商鞅の変法において軸となるのが田制であると推測した。

第二章では、吉本氏の論文「商鞅変法研究序説」に依拠して商鞅変法の年代、期間、内容について検討した上で商鞅変法の分類を行った。変法の内容について、吉本氏は一次変法の法令群のみならず、年代記的記述の為された制度改革ですら、商鞅の施行とは認めたい政策も存在することから、後世の手による意図的な商鞅変法の加増・改変が見て取れると考察している。この見解を踏まえて、『史

記』商君列伝の商鞅変法群を商鞅自身が行ったと思われるものと、そうでないものとに分類した結果、商鞅の変法の核をなすと考えていた阡陌制(田制)は商鞅自身の変法であることが否定された。また、商鞅が肯定、否定両方の象徴として、利用されたことが分かる。後世に伝えられた商鞅像は政治に関わる者によって、意図的に装飾されていたと言える。

本論文で、商鞅の変法と田制についての先行研究を整理した。しかし、ここで取り上げたものは先行研究のほんの一部である。変法のみならず、変法当時の秦の社会状況や商鞅が政治思想において影響を受けたであろう人物についてまとめる必要がある。また、1975年に出土された雲夢睡虎地秦簡を始めとする出土資料との比較検討を行ったうえで、史料にもとづいた緻密な商鞅の人物像分析が必要である。

国民保導連盟について

遠藤 和恵

1948年8月15日に朝鮮半島の南半部に樹立された大韓民国政府が徹底した反共主義を掲げる中、翌年4月には反体制的思想犯や左翼転向者に対する善導の方法として、左翼勢力に対する統制と懐柔を目的とした国民保導連盟が結成された。当初、左翼転向者の保護・指導（保導）を掲げて結成された保導連盟だったが、50年6月25日に朝鮮戦争が勃発すると李承晩政権下で保導連盟関係者処刑計画が準備され、保導連盟事件と呼ばれる集団虐殺が行われた。本論文では国民保導連盟の報道内容に焦点を当てて、韓国社会において保導連盟がどのように認識されてきたのかを明らかにすることを目的とした。さらに、現在も続く保導連盟事件の真相究明活動の過程を整理し、韓国社会の保導連盟に対する反応や認識の変化についても考察した。

第1章では、先行研究や当時の新聞記事を基に1945～50年における国民保導連盟の創設背景とその活動内容について述べた。また、当時の新聞報道から読み取れる韓国社会の保導連盟に対する認識についても言及した。

第2章では、朝鮮戦争時の保導連盟事件について述べた。また、当時の新聞記事や日記から韓国社会の保導連盟に対する認識を考察し、戦争勃発によるその認識の変化について言及した。

第3章では、1960年から現在にかけての保導連盟事件に対する真相究明過程について、国会の調査委員会、遺族会、真実・和解のための過去史整理委員会の活動を取り上げ、それぞれの活動内容と当時の新聞報道を紹介した。

以上の考察から保導連盟に対する韓国社会の反応は、朝鮮戦争以前は表面的には保導連

盟を肯定し積極的に加盟を促していたが、戦争勃発を機にそれが一変し、保導連盟員を虐殺の対象と見なすようになった。また、戦争後も韓国社会全体が保導連盟を共産主義勢力の一つであり朝鮮戦争時の敵であったと見なしていたため、長い間虐殺事件の被害者とその遺族に対する差別行為が続いてきた。4・19革命後は国会調査委員会や各地の遺族会が真相究明のために活動し始め、虐殺事件に対する韓国社会の関心は高まっていったものの、結局のところ保導連盟員に対する否定的な認識は変わっていなかった。近年になってようやく真実・和解のための過去史整理委員会が発足し、国民保導連盟事件の実態が明らかになったことを受けて盧武鉉大統領（当時）をはじめ韓国社会の反応も変わってきたようである。しかし、真実・和解委員会の活動や保導連盟員に対して否定的な認識を持っている人々が未だ多いのは事実である。真相究明のための活動を継続させ、着々と明らかにされていく虐殺事件の実態に伴って保導連盟に対する韓国社会の認識も変化していくべきではないだろうか。

南北朝鮮の言語差に対する認識について

大高 里菜

朝鮮半島の分断（1948年～）以降、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国（以下、本稿では「韓国」「北朝鮮」と称する）は社会体制・制度の違いにより、それぞれ独自の文化を発展させてきた。その中でも、意思疎通が不可能なほど深刻ではないが、韓国と北朝鮮それぞれの言語に違いが生じ、そのことが研究者に限らず一般の人々の関心も集めている。

言語の異質化とは、同じ言語を使う人々が長い間別々に暮らすことによって言語に違いが生まれることである。言語の違いは音韻・文法・語彙などに現れるが、一番初めに変わるのが語彙である。北朝鮮では、綴字法、標準語規定や外来語表記法など、語文規定が韓国と異なるために変化した語彙が多くある。

本稿では、特に、南北首脳会談（2000年6月15日）のテレビ放映をきっかけに北朝鮮の言語に対する韓国の人々の関心が高まったのではないかと考えたため、南北首脳会談前後はもちろん、1990年代～2010年までの韓国の新聞記事を参考にしながら、南北の言語に対する韓国人の見解を読み取ることを試みた。また、実際に、言語使用の場において、どのような差異や問題点があるかも同時に考察した。

南北の言語差は、言語規範の違いによって現れるため、第1章では、南北の言語規範の違い及びそれによって現れた異質化の例について述べた。

第2章では、北朝鮮の「文化語」や、南北の言語政策機関について述べた。南北の言語差に対する韓国の人々の認識についても1990年～現在の新聞記事から読み取った。

筆者が1990年代から現在までの新聞記事を調査した限りでは、異質化は深刻なレベル

ではないという記事が2編しかなかった。これは、社会体制が違うために、北朝鮮の文化語運動などで生まれた言葉などが、異質化の要素として大きく取り上げられているためだと考える。1つ違いを見つけてしまうとそこばかりに目が向けられがちであるが、2004年8月24日付の京郷新聞によると、金正日は、金大中の言葉を80%は理解できたことが分かった。したがって、南北の言語が異質化していると言い切ることはできない。しかし、第1章で述べた同音異義語については、南北の人々の意思疎通に支障をきたすため、統一に向けて調整しなければならない問題であると考えられる。

実際の言語使用の場については、金正日の例しか挙げられなかったが、今後、南北統一に向けて南北の人々が交流する機会が増えることによってさまざまな差異や問題点が明らかになるだろう。そうすれば、南北言語の異質化に対する人々の相互理解が深まり、言語差に対する違和感も薄れていくと考える。

光武帝による奴婢政策に関する一考察

後藤 智香

両漢交替期、帝位につき全国統一を目指した光武帝は各地を平定するかたわら後漢王朝の土台を築くため数多くの政策を打ち出した。その中でも奴婢政策は民政政策として初めに着手し、その後も頻繁に実施した政策である。さらに、前漢や新の皇帝も光武帝と同様に着手していることから見ても、奴婢問題が当時重大な問題であったことがうかがえる。本論文では光武帝の建武二(26)年から建武十四(38)年にかけて行った個々の奴婢政策をその背景と共に考察していくことにより、光武帝の奴婢政策に対する意図や位置づけについて自分なりの見解を示そうと試みた。

第一章第一節では、光武帝が奴婢政策を建国当初から着手せざるをえなかった背景について考察し、後漢初期は新代における奴婢の増加に加え、依然として庶人の奴婢化がさらに深刻化する可能性を秘めていたことを確認した。第二節では漢代の奴婢と庶人の性格の違いについて確認することにより、奴婢の減少・庶人の増加がもたらす利点や光武帝の奴婢問題に対する考え方について考察した。第三節では王莽の奴婢政策が光武帝の奴婢政策へどのような影響を及ぼしたかについて考察した。

光武帝の奴婢政策は、性格上二つに区分することができる。本論文では、奴婢の解放を目的とした政策を奴婢解放政策、奴婢の非平等的な法律の改正を目的としたものを奴婢保護政策と称した。第二章第一節では、奴婢解放政策の概要と意図についてそれぞれ個別に考察を行った。奴婢解放政策は、労働力の確保や叛乱軍の軍事力軽減など目に見える意図も多く存在したが、結果的に叛乱軍に対する民心の離反を促し、「復漢」を望む民心を掌握

する手立てともなっていたと指摘した。第二節では奴婢保護政策の概要と意図について考察した。漢律をもとに出した政策であることから見ても光武帝が前漢の継承者という立場を確立させ、「復漢」を求める民衆を自らに取り込もうとしたと指摘した。第三節では第一節と第二節のそれぞれの考察を踏まえ、先行研究の「豪族の抑圧」「生産力の確保」「奴婢の社会的地位の向上」という視点をもとに奴婢政策の意図について考察した。

第三章では奴婢政策が後漢王朝でどのような役割を果たしていたのかについて考察した。奴婢政策は光武帝の民政政策の一環として行われたものであり、光武帝が後漢王朝を建国していく上で必要となった労働力の獲得や人心の掌握などに役だったと指摘した。

以上、本論では奴婢問題が早急に取り組むべき問題でありながら傾国の危うさを持ち合わせたものであったことを指摘し、光武帝が奴婢問題の解決に慎重にならざるをえない状況であったことを確認することができた。また、光武帝の奴婢政策は王莽より消極的な政策であったものの、労働力の獲得や人心の掌握など後漢王朝の基盤を築く上で様々な役割を担っていたことを提示することができた。

中国紅十字会の成立と変遷

— 清末から1923年の活動を中心に —

佐島 小乃実

伝統中国社会において、慈善事業は「善会」などの民間団体によって担われていた。しかし近代以降の国際情勢の複雑化に伴い、既存の民間団体では対応しきれない問題に直面することになった。このような時期に慈善事業に取り組んだ団体として、「中国紅十字会」がある。「紅十字」とは、戦時における負傷者や捕虜の保護を目的として1859年にスイスで創設された国際協力機関「赤十字」の中国語訳である。

本論文では、中国紅十字会総会編『中国紅十字会資料選編1904-1949』（1993）を主な史料とし、中国紅十字会が成立した清末から1923年までの組織と活動の変遷を詳細に考察することにより、各時期における中国紅十字会の実像とその意義を明らかにすることを課題とした。

第一章では、まず中国紅十字会の前身として中外合作方式で清末に成立した「上海万国紅十字会」の成立背景と組織形態を考察した。さらに日露戦争期の同会の活動、及び西洋人宣教師を中心に組織された東北部各地の分会が行った救済活動の実態の解明を試みた。また、上海万国紅十字会の活動停止後、官僚らの働きかけによって試行された「中国紅十字会」と、上海において民間で設立された「万国董事会」の対立関係を分析することにより、辛亥革命期における両会の活動の特徴を明らかにできた。

第二章では、正式の統一団体として1912年に成立した「中国紅十字会」について、その成立時期から1921年までの組織の形態と活動の変遷をたどった。まず、1912年に公布された章程について考察し、また中国紅十字会の中核的な職務を担う常議会議員の出身

地、経歴、年齢などを分析・整理した。さらに、1920年の改組後の常議員の構成と、1921年までの中国紅十字会の会長及び副会長の変遷を整理した。会の活動については、中国各地で発生した天災や人災時の救済活動を取り上げ、義捐金の額や物資の内容などを中心に、紅十字会の活動の実態を究明した。国外における救済活動としては、ロシア革命前後における極東での中国人とロシア人に対する救護活動を取り上げて考察した。

第三章では、1922年から1923年の組織と活動について考察した。具体的には、新たに制定された15章71条からなる1922年の章程を考察し、あわせて同年に選出された常議員の構成を分析した。また、中国国内における天災や人災時の救済活動の分析によって、救済活動の主体が中国紅十字会から各地の分会へ移ったことや、分会同士の連携が進んだことなどを示した。国外における活動については、関東大震災を取り上げ、東京及び横浜に派遣された救護隊の救護・慰問活動、被災した華僑が上海へ帰国した際に行われた中国国内での医療活動、また各地の分会の支援活動について、それぞれの実態を明らかにした。

以上により、中国紅十字会は、組織内では時として対立しながらも、中国全土、さらには世界規模で救済活動を行った慈善団体であることが明らかとなった。従来は各種団体によって限定された地域の中で行われていた慈善事業が、中国紅十字会の設立によって新たな性格を獲得したと考えられる。

1880年代～1910年代初期の京城における在朝日本人社会について — 京城居留民団の活動を中心に —

信田 奈那子

1876年の日朝修好条規の締結により、日本人が朝鮮に移り住むようになった。京城（現在のソウル）において一般の日本人の居住が許されるようになったのは1884年のことである。その後、居留地の拡大を背景として京城居留民団が設立された。本論文では、1885年から1914年にかけて存在したこの京城居留民団という団体に焦点をあて、その成立や拡大過程、自治をめぐる統監府・総督府と在朝日本人の対立など、任意団体期と法人団体期に分けて京城居留民団の歴史について詳しく考察することを試みた。

第1章では、任意団体期の京城居留民団の成立過程や活動内容、中心人物について考察した。1885年に居留民総代役場を設立したのが京城居留民団の始まりであった。居留民規則などの発布により、それまで領事館から委任された業務を行なっているに過ぎなかったが、領事の監督を受けつつ居留民の公共事務を自ら処理するようになっていった。この時期の居留民団は、学校の新築、道路の改修など居留地全般に関わることを一から整備し、自分たちにとって住みやすい環境を整えていった。また、居留民団の民長や議員の多くは、一攫千金を夢見て朝鮮に渡り成功した商人たちであることがうかがえた。民長や議員は居留民の代表者として相当の地位を持っていたため、派閥争いが展開されることも少なくなかった。

第2章では、法人団体期の京城居留民団の拡大過程や活動内容、議員選挙の様子、自治をめぐる対立について考察した。1899年以降、法人化運動が行なわれるようになり、ようやく朝鮮に居ながら日本の国内法で認定された権限を持つことになった。この時期の活

動は、在朝日本人の増加に対応するための現状の改善で手一杯であった。徐々に歳出も増え、居留民の負担は大きくなり、居留民団の拡大に限界が表れ始めたとも言える。1908年には、居留民団の自治をある程度認めてきた方針とは一変し統監府は民長官選令を発表したが、居留民団は自らの歴史を汚すものだとしてこれに猛反対した。居留民団解体をめぐっても、在朝日本人らはそれまでと同様の権利を維持しようと最後まで自治制の存続を求め続けた。

京城居留民団は領事館や統監府、総督府と従属関係にあり、その政策に左右されつつも、京城の在朝日本人を代表する機関として教育・土木・衛生など居留地の公共事務を執り行ってきた。統監府時代には民長官選問題、総督府時代には居留民団廃止をめぐって対立があり、京城居留民団の歴史は対立の歴史でもあったと言える。統監府や総督府は、朝鮮内で絶対の権力を持つための政策に居留民団を利用しようとし、自治の削減も厭わない姿勢を見せた。その一方で、ようやく自治が認められ、在朝日本人社会を拡大させてきたことが在朝日本人にとってのアイデンティティであった。この両者の利害関係の衝突が対立として表れたと考えられる。

1930年代における在日朝鮮人の生活史

— 在日朝鮮人生活調査を通して見る生活環境と調査の特徴 —

田中 翔子

現在日本には数多くの在日朝鮮人が暮らしているが、朝鮮人が日本に渡来し居住するようになった背景には日本の朝鮮植民地支配が大きく関係している。本論文では在日朝鮮人社会の拡大・定着期とされている1930年代に焦点を当て、当時の在日朝鮮人生活調査から彼らの生活環境と朝鮮人生活調査の特徴について検討した。

第1章では1930年代に朝鮮人が渡来した経緯についてまとめた。渡日した朝鮮人の多くは労働目的の農民であり、朝鮮人の渡日は日本が植民地期朝鮮に行った土地調査事業と産米増殖計画事業が大きく影響していた。土地調査事業によって土地をなくした農民は小作人となり貧困化し、また産米増殖計画事業では朝鮮の米が日本移出され朝鮮内の米消費は減少し春窮農家が増え農民は困窮を極めていった。結果、農民は没落し離農離村が起き、労働のために日本内地や満州へ渡航する者が増加した。朝鮮人労働者が増加したことによって日本国内の失業問題は悪化し、日本政府は朝鮮人の渡航制限をする等の対策を行ったが一方で不正渡航が増え規制の効果は低かった。当時の新聞からも失業者増加の問題に対する日本政府の対応が読み取れた。

第2章では日本の中でも在日朝鮮人数が多い大阪と東京の在日朝鮮人生活調査について取り上げた。1930年代の4つの資料から、当時の在日朝鮮人の生活状態と生活調査資料の特徴を考察した。調査内容は〈調査の目的や調査の方法〉〈調査事項〉〈世帯数・世帯員数〉〈収入と支出〉〈住居状態〉〈職種〉に焦点を当て、調査結果と資料の特徴を検討した。4つの調査資料では、作成目的によって調査事項に違いが見られた。警察の調査資料では在日

朝鮮人の犯罪や紛議、要注意者等の調査が多く行われ、福利目的の調査資料では要保護世帯数を載せてあるなど、資料ごとに特色があった。

1930年代の在日朝鮮人は言葉や風俗習慣の違いから日本人と馴染めず、職は非熟練でもできる低賃金で重労働の仕事が多かった。資料から、当時の朝鮮人労働者の収入は日本人労働者よりもかなり低く、住居の1人当たり畳数は2畳も無く、密住状態で貧しい生活をしていたことが伺えた。警察の調査資料を除く3つの資料の作成目的は、当時朝鮮人が急激に増加したことによって悪化した国内の失業問題や社会問題を解決することであり、日本人が朝鮮人の生活状態をより理解しようと調査が行われていたと考えられる。

満州731部隊と日本の細菌戦

野口 真莉菜

731部隊とは、1932年から日本の敗戦に至るまで、満州において細菌戦の研究、実戦を行っていた関東軍配下の部隊である。731部隊に関する研究は、設立前史から終戦後の動向まで一通り研究がなされているが、同部隊の前身となった陸軍軍医学校の設立から防疫学、細菌兵器転用への過程を詳細に追っているものはほとんど見られない。そこで本論文では陸軍軍医学校の歴史をもとに設立の背景を追うほか、組織や活動内容の実態を検討した。

第一章では伝染病や防疫学の歴史、また陸軍軍医学校の防疫研究発展の歴史をもとに、部隊設立の背景を明らかにした。医学の発展とともに19世紀末より、人為的に伝染病を流行させ、敵の戦闘力や生産力を弱める細菌戦という考えが生まれた。1870年陸軍軍医学校の創立以後、伝染病の被害状況を案じて防疫学は次第に力を入れられるようになった。防疫学が兵器へと転用されるようになった契機は、後の731部隊長石井四郎の欧米視察である。石井主幹のもと日本において細菌戦研究が開始し、その実地応用の地として満州に防疫機関を設立、731部隊が発足した。

第二章では部隊の設立に焦点を当てた。同部隊の名目上の任務は戦地における病気の予防と浄水の供給だったが、業務の大部分を占めたのが細菌兵器の実戦開発であった。細菌研究の第一部、実験・生産を担当する第二部、血清とワクチン生産を行っていた第三部、主に濾水器製造を行っていた第四部を主として成り立っていた。細菌戦の実施は、それまで戦場においては後方での救援活動しか期待されていなかった軍医および医学が、攻撃において役立つということである。部隊長石井四

郎は医学を利用して軍医の地位向上を画策していたのだった。

第三章では部隊の活動について捉えた。731部隊が細菌研究において重要視していた細菌はペスト菌である。諸外国においてもペストは細菌兵器として有効であるという意見が多くあり、攻撃のためとしても自国が細菌攻撃を受けた際の自衛としても、ペスト菌研究は力を入れられた。さらに731部隊は細菌研究に必要な生体材料を入手するため、関東憲兵隊と結託していた。憲兵隊が中国国内で実験材料になる人間を捕え、731部隊に提供していたのだ。731部隊の細菌戦の準備工作は1939年には試験段階を終え、1939年から1942年の間は実戦段階となった。日本軍の中国戦線の侵攻に応じて731部隊は細菌を展開した。これに対し中国側は調査検証を行い、具体的な防疫対策も取っていたが、細菌戦の被害を食い止めることは出来なかった。

以上731部隊の設立前史からその活動内容を検討し、考察を加えた。731部隊は軍医学校から設立した部隊であり、本来人を救うための医学を兵器へと転用するという残虐性を有していたのだ。さらに731部隊がもたらしたのは人命と物質的な損害だけでない。細菌戦により地域社会のネットワークを破壊し、戦後においてもなお多くの人々を苦しめてきたのである。

金庸武俠小説研究

— 『射鵬英雄伝』の分析から —

綿貫 恵

金庸(1924～)の武俠小説は、伝統的な武俠小説の手法や世界観を引き継ぎ、民衆を楽しませると同時に、知識人からも近代小説として高い評価を受けている。本論文では、金庸の代表作のひとつである『射鵬英雄伝』を題材に金庸の小説の特徴を分析し、商業的に成功しながら同時に多くの知識人からも高い評価を受けている要因を考察した。

第一章では、金庸の略歴および全作品のタイトル等を紹介し、金庸小説中の『射鵬英雄伝』の位置づけを述べた。

第二章では、『射鵬英雄伝』に明確な善と悪の対立構造が存在したことから、金庸が娯楽的な小説を志向したと述べた。主人公郭靖と敵対した金国の支配者層は一貫して単純な悪役として描かれた。また、物語前半においては勇猛果敢な英雄として描かれていたジンギスカーンは、郭靖との対立を経た物語後半において、残虐な悪役に転落した。『射鵬英雄伝』における善悪の描かれ方は郭靖の視点からの主観的なものなのである。善悪の対立を分かりやすく描くことは、作品に強いコントラストと起伏のあるストーリー性を与え、大衆小説として商業的成功を収めることに有効に働いた。

第三章では、『射鵬英雄伝』の現実世界との関わりやその批判精神について検討した。『射鵬英雄伝』における蒙古の民族内での対立や、ジンギスカーンの描かれ方からは、金庸自身が青年期に経験した抗日戦争時代の中国の政治や、国民党と共産党の内部対立、また執筆当時の共産党および毛沢東の政治に対する批判が読み取れる。更に、反礼教的な人物である黄藥師の描写を通して、中国の伝統世界で当然のように受け入れられている礼教として

の儒教に疑問を投げける一方で、五四新文化運動での儒教批判への反発も存在していることを述べた。これらの現実世界へのメッセージからは、金庸がその小説中に救国、民衆啓蒙の意識を込めていたことが伺える。これらの意識の存在や、作品から現実社会への批判的な主張を見出せる点を、知識人たちは「近代性」として高く評価したのである。

以上から、金庸の武俠小説には、伝統と近代の共存、娯楽性と政治性の共存、商業性と文学性の共存が成立している。一見して相反する多くの要素を内包している点に金庸小説の画期的価値が見出せるのである。金庸の小説を論じるにあたっては、中国近現代小説で主流となっている、現実世界に即した小説の社会性や啓蒙の意識を高く評価しようとする視点から脱することが必要である。多くの要素を内包することを認めたくうで、個々の作品が執筆された背景に目を向け、その文学的工夫や努力、作中にこめられた主張などを見出すべきなのである。

中国近代秘密結社と上海

— 民国の上海青幫を取り上げて —

Loh Yan Yee Penny

中国では秘密結社が数多く存在していたが、これらは大まかに白蓮教を主体とする宗教結社と、天地会を主体とする民衆結社に分けることができる。また、民国の中国の秘密結社として、上海青幫を挙げることができるが、その源流は羅教という運漕業に携わる下層民衆が中心となった相互扶助的な宗教結社であった。近代に入ると、青幫は政府と結託しながら、アヘン売買や賭博の経営に携わったりするなど、いわゆる「黒社会」組織へと転身した。本論文では、近代以前の青幫の成立と変遷を明らかにし、次に、アヘン・麻薬売買に関する活動を通し、民国期における青幫と国民党政府との関わり、日本側との関わりを検討した。

第1章では、青幫の源流である羅教の形成と、規範や入会儀式などが定まった水碼頭時代の青幫について考察した。羅教は明代中期に羅清という元運漕業軍人によって作られた新興宗教である。羅教は運漕業に携わる人々をはじめ、多くの信仰者を有していたが、やがて政府に邪教とみなされ、ついそれに対する弾圧が始まった。これに加え、清の乾隆帝による厳しい取締りにより、羅教はついその転換点を迎えた。羅教はその活動中心を船に移し、規範や入会儀式などを定め、運漕業の水手による水碼頭時代の青幫に転身した。

第2章では、水碼頭時代から早碼頭時代に転身した青幫と、黒社会組織になった民国の青幫、及びその変遷について検討した。清末の海運の開始と太平天国の乱により、青幫はその根拠地を陸地に移し、両淮塩場で「青皮」という組織と合流し、「安清道友」という組織を結成し、私塩販売を行った。これが早碼頭時代の青幫である。その後、青幫は拠点を

上海に移り、民国期には新たな活動を開始した。民国期、上海青幫を代表する人物として、杜月笙を挙げることができる。彼は裏社会のボスでありながら、一方で蒋介石に重用され、軍・商など様々な業界に進出し、表社会に出ていた。それゆえ、彼は最も民国の青幫を代表する人物であると言える。

第3章では、民国期の青幫のアヘン・麻薬活動を通し、青幫と国民党との関係、青幫と日本との関係について考察した。財政困難に直面した国民党政府と、表社会に出ようとする裏組織の青幫は、禁煙活動を通して、それぞれが直面する問題を解決しようとした。同じころ、中国侵略を企む日本側と金儲けを目的とする青幫は、アヘン・麻薬売買活動を通じて深い関係を持つこととなった。

本論文では、青幫の成立と変遷、および民国期における青幫の活動について検討した。近代以前の青幫は、相互扶助を目的とした組織であったが、民国期に入ると黒社会組織へと転身した。また青幫は、アヘン・麻薬販売活動を通じて、国民党政府や日本と関係を深め、互いに「利用し合う」という関係を築いたのである。